

## 「富士山のまち」「紙のまち」にふさわしいシンボル

富士山への雄大な景観という最大の地域資源を有し、水資源の豊富さから江戸時代には「駿河半紙」の産地として、また、明治以降は洋紙製造業のまちとして発展してきました

富士市の新しい顔として、この文化、歴史を表し、富士山への眺望を最大限に享受できる、この地域を描いた世界的に有名な浮世絵のような、軽やかな紙のような建築形式を提案します

### 設計コンセプト

#### ～にぎわいが積層し、街へと溢れ出す、市民の活動拠点～

日常の中で、いつでも、ふらっと、行きたいときに訪れることができ、そこに行けば新しい発見や出会いがあり、さらには、その賑わいを街全体にも波及できるような場所としたい

次の50年に向けて、これからの富士市の未来をつくる賑わいの拠点施設を実現したい



富嶽三十六景「駿州江尻」駿河半紙が風に舞う風景が描かれている



※本パース図は、プロポーザルで提案されたイメージであり、今後、変更の可能性があります

## 富士山ビューを満喫するテラス

室内と連動して使える”もう一つの空間”です

## 街と一体になる「おまつり広場」

### 商店街を受ける大きな木の階段

公益施設の「おまつり広場」から本町通りへの一体的な歩行空間を創出します



※本パース図は、プロポーザルで提案されたイメージであり、今後、変更の可能性があります